

「安保法の廃止を目指して」

2015年09月21日

安倍首相が独裁的に安保法案を成立させたことに、怒りが収まらない。安倍首相はしばしば「私が総理大臣である」と豪語していた。憲法学者の小林節氏は自民党の憲法改定を支持していたが、姑息な解釈改憲に怒り、集团的自衛権行使に激しく反対するようになった。小林氏は公聴会で、政治家を「雇われマダムのような」と例え、謙虚さを求めている。先の衆議院選挙は「アベノミクス」の経済政策を問う選挙であった。その選挙では、有権者の20数%が自民党に投票しただけで、国民の信任を受けたとはとても言えない。ところが勝利した途端、国民の信任を得たとして、公約に入れていたと集团的自衛権行使を閣議決定し、安保法案を全面に出してきた。

また、安倍首相は「時が経てば（安保法案の）正しさが理解される」と言う。1万人を越す学者たち、多くの法律の専門家たちも「違憲」を指摘し、安保法案反対を表明したが、この学者、専門家たちを、現実が見えず無知と言わんばかりに、無視している。元最高裁判事の違憲発言に対しても「今や一個人」と切って捨てるような応答をした。遅きに失した学者だけでなく、戦争を体験したオールドから、戦場に駆り出されることを心配したヤングまで、そして、子どもを戦場に送り出したいくない若いママたち、言論人、作家、演劇人、落語家からコメディアンまで、広範な反対表明がなされた。

安倍首相の傲慢は天井知らずである。このような政治風土を許したのは、我々国民の責任でもあることをしっかり認識する必要がある。この問題に関し、9月19日の「東京新聞」に掲載された中村哲氏の言葉が心に残った。中村氏は戦火のアフガニスタンで、医療だけでなく、井戸掘りや用水路を建設する人道支援を続けている。中村氏は、戦争作家として人気を集めたが、戦後、自殺した火野葦平の甥である。叔父が自殺するほど戦争責任に悩み抜いた姿を見た。戦争が破壊するのは体だけではない。心もズタズタに壊される。アフガニスタンでも民兵や武装勢力、住民の別を問わず、人々の心が壊された過酷な現実を見た。絶望するほど考え抜くことが必要ではないか。『週刊金曜日』に映画監督の森達也氏は「深い絶望とともに考え続けるからこそ、現実的な選択ができる」と書いている。

3・11の大震災が起きたのを忘れたかのように、オリンピックで大騒ぎをしている。そして、安直に、原発再稼働、原発輸出までする。中村氏は「帰国するたび、違う惑星に来たような気がする。日本人はみんな動いて、その動きに乗れない人間をはじく」と語っている。日本の国会でなされている集团的自衛権行使や安保法制を巡る議論の「ゲームのような軽さ」に愕然とする。そして「武力行使が身を守ると信じるのは、妄想そのもの」と、妄想を問い直せと言われる。中村氏の診療所が襲撃された時「死んでも撃ち返すな」と仲間に行った。報復の連鎖を断ち切ることが、後々、自分と仲間と事業を守った。

ご自分の著書『天、共に在り』に、下記のように書いている。「利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切らない誠実さこそが、人々の心に触れる。それは、武力以上に強固な安全を提供してくれ、人々を動かすことができる。」「私たちにあって平和とは理念ではなく、現実の力なのだ。私たちはいとも安易に戦争と平和を語りすぎる。武力行使によって守られるものは何か、静かに思いをいたすべきかと思われる。」

テロリズムは欧米の武力行使では収まらない。彼らにあれだけの戦力を保持できるということは相当の支援があり、怒りが深いということである。国民の安全を顧みず、米国首脳から頭をなでられて喜ぶ安倍首相には何としても退陣してもらわなければならない。